

残そう、自然の宝石箱・のりくら

くらがね通信

No.59 (冬号)

乗鞍岳と飛驒の自然を考える会

2015年1月25日発行

第15回総会・環境講演会のご案内

期日：3月14日(土) 会場：丹生川支所2Fホール

★環境講演会 開場 13:30 開演：14:00

「飛驒山脈の成り立ち」～マグマとプレートの壮大な競演物語～
『「槍・穂高」名峰誕生ミステリー』(ヤマケイ文庫)で知られる飛驒山脈の地質研究の第一人者である、原山智さんに講演していただきます。

講師：原山 智(信州大学理学部地質学科教授)

★第15回総会(環境講演会終了後 15:30 開始予定)

もっと乗鞍岳のことを知ろう【その1】

木下喜代男

飛驒人が朝な夕なに仰ぎ、いくつもの学校の校歌でうたわれるほど親しまれ、崇められてきた「母なる山」乗鞍岳。昔から信仰の山として、明治以降は近代登山の対象になって登られてきたが、戦後自動車道の開通とともに観光の山となり、飛驒側からあったいくつかの登山道も次第に廃れてしまった。信州側(東面)は古くから大きく開発され、今でもスキー場などリゾート地として殷賑を極めているが、飛驒側の西面、南面は幸いにも開発を免れ、原始の姿に戻りつつあると言える。

実は自分の登山寿命が少なくなった現在、ライフワークのようにして再びこの山にこだわり、西面、南面などへ山スキー、沢登りに通っているが、入山のたびにこの山の大きさ、自然のすばらしさに圧倒されている。まさに「灯台もと暗し」であった。今や麓から歩いて乗鞍岳へ登ったことのある人も少なくなりつつあるが、後のために西面、南面のことを書き留めておいたほうが良いと思い立ち、今までの山行に若干の歴史も交えて綴ってみたのがこの小稿である。

「飛驒乗鞍スキー場のこと」

①大尾根・日影平・枯松平ゲレンデ

乗鞍岳の頂上剣ヶ峰(3,025 m)から西へ派生した尾根は千町ヶ原で分岐し、丸黒尾根となってさらに北西へと延びている。昭和初期から戦後しばらくまでの間、この長大な尾根全体が「飛驒乗鞍スキー場」として全国からのスキーヤーで賑わっていたことをご存じだろうか。頂上へ至るコースの途中には、飛驒山岳会管理の4軒のヒュッテと1軒の避難小屋があり、信州の八方尾

根などともに全国的に有名であった。

そのコースの最下部にあった大尾根ゲレンデは、昭和7年に飛騨山岳会員が旧丹生川村山口地内に適地を見つけ、翌昭和8年には飛騨出身の牧野良三（当時通信省政務次官）の尽力で建設が開始された。滝集落からの自動車道路、大尾根ヒュッテ、さらに上部の日影平ヒュッテ、枯松平ヒュッテ、桜ヶ根避難小屋、千町ヶ原ヒュッテが次々と完成し、昭和9年の1月には大尾根ヒュッテで、参列者1,000余名のもとに「飛騨乗鞍スキー場」開場式が挙行された。

大尾根ゲレンデへ至る道路は、大八賀村村民や斐太中学生徒などの協力で、驚くほど短期間で完成した。この道は今でも「牧野道路」と呼ばれている。折しもこの年の10月には高山線が全線開通し、国鉄のPRによって全国からの多くのスキーヤーが訪れるようになったのである。昭和16年鉄道省発行の『日本山岳案内―スキー場編』（博文館）には、大尾根ゲレンデ、日影ゲレンデ、枯松平ゲレンデ、千町ヶ原ゲレンデの四つ広大なゲレンデで構成される高山線沿線随一の山岳スキー場であるとしてある。高山駅から生井までの貸切自動車は片道5円とあるが、当時の市内の旅館宿泊料が1円50銭からないのでずいぶん高い。これは戦時下でガソリンが貴重だったからだ。しかしその後戦時体制の強化とともに次第に登山者も少なくなり、戦後は各地のスキー場にリフトが出現すると、この広大な山岳スキー場は急速に廃れてしまった。これは、今まで広野を自由に駆け回っていた野生動物が動物園に入れられたごとく、スキーヤーは狭いゲレンデに閉じ込められてしまい、そのうち故郷の広野のことを忘れてしまったといえる。しかし近年再び「脱ゲレンデ派」が台頭しており、うれしいことだ。その後、この尾根上に乗鞍スカイライン建設構想が持ち上がり、杭打ちまでされたがなぜか立ち消えとなり、現在その尾根上で開発されている場所は「国立青少年交流の家」「飛騨高山スキー場」だけである。

「青少年交流の家」がある日影平から生井集落までの尾根は、三角点がある主峰（1,478 m）を中心に標高1,400 mから1,300 m級のピークが連続し、大尾根（おおおね）と呼ばれている。この主峰の西に50人程の宿泊可能な「大尾根ヒュッテ」があり、ちょっとしたゲレンデがあったというが、今は樹林帯に還ってしまってその痕跡もない。

私のはじめてスキーで大尾根を訪れたのは、「国立乗鞍青年の家」ができる前の昭和40年代前半。今はビニールハウスが立ち並ぶ畑地になっているが、その頃はなにもなく、乗鞍の眺望がすばらしくて春先にスキーでよく通ったものだ。広い雪原を日影平まで足を延ばすと、そこにはまだ壊れかけた日影平ヒュッテ（通称牧野ヒュッテ）がまだ残っていた。場所は今の「青少年交流の家」



乗鞍岳登山(昭和9年)



日影平ヒュッテ

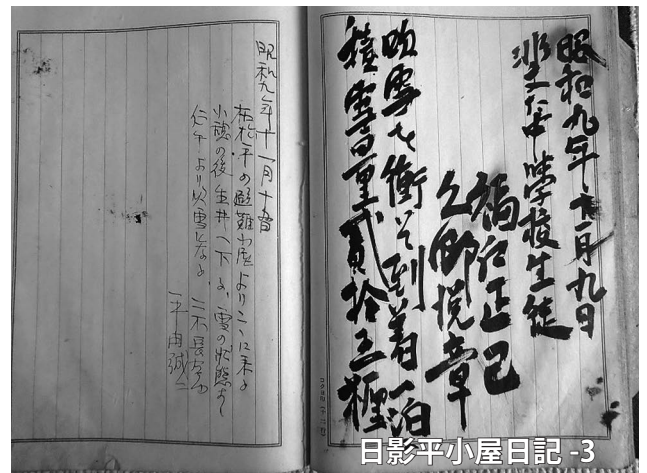
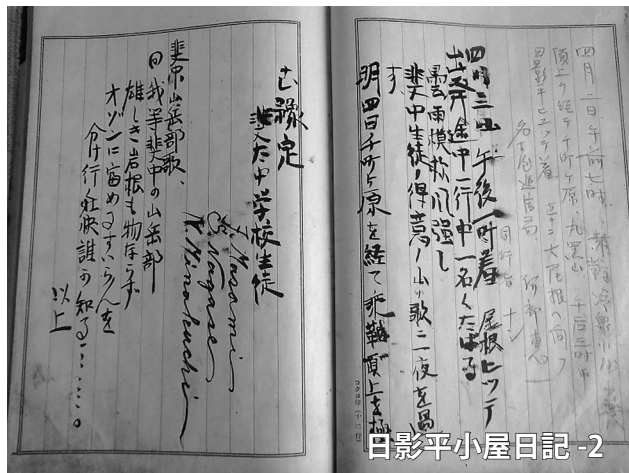
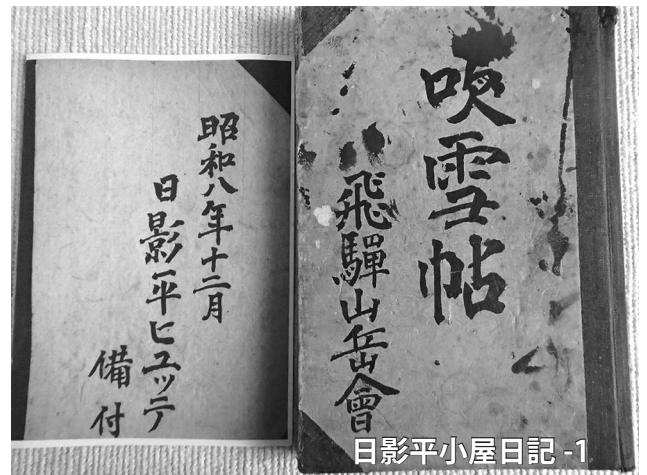


大尾根スキー場での大会(昭和10年)

の傍だった、当時は生井まで高山始発の定期バスで行き、神社の裏から登った。ほとんどが単独行だったが、ある時は淡い恋心を抱いた同行者もあり、今でも大尾根を歩くとその遠き日が思い出される。

2014年4月はじめのよく晴れた日、久しぶりに大尾根を歩きたくなって車を走らせる。「青少年交流の家」へ至る県道を登り、もう営業を終えた飛騨高山スキーを過ぎたところに駐車してスキーを履く。生井集落へ通じている林道をしばらく歩き、途中から大尾根に取りつく。やがて近くに飛騨山脈が見えだし、遠くに白山連峰、そして飛越の山々が一望できる。多くの先人スキーヤーが乗鞍への往復に通った尾根を、眺望を楽しみながら散策し、往路を戻った。10年くらい前にきたときは旧丹生川村側が広範囲に伐採されていたが、その後杉や檜が植林されてそれが私の背丈を越えていた。それが遠からずここからの絶好の眺望を遮ることになるだろう。麓へ下ると、生井集落で地元の人が「春木山」をしていた。このあたりは飛騨の古い山村のたたずまいを今に残していて、何時きても心がなごむところだ。

枯松平には近年県によって避難小屋が建てられた。2012年の12月、久しぶりにスキーで小屋まで行ってみたが、静寂に包まれた樹林帯を歩くのがとても楽しかった。



※今回から乗鞍にまつわる執筆を木下さんをお願いしました。次回以降も乞うご期待。

丹生川の石仏 (その2) 石仏の正月 丹生川村板殿

住 寿美子

丹生川村根方から北東へ延びる林道を登っていくと、十数戸の家々が集まる板殿に至ります。八本原の麓に位置する集落の東方には乗鞍岳が大きく聳え、はるか西方には白山を眺めることができます。平成9年に発掘された岩垣内遺跡からは47基の住居跡、100個近い土偶片が出土しました。また「土器捨て場」と言われる所からは膨大な数の縄文土器が出土し、当時の人々の豊かな営みを窺い知ることが出来ました。このように人々は遠い昔からこの豊かな地で生活を営み文化を育ててきました。日本で石仏が民衆化し盛んに造営されるのは、江戸時代に入ってからのもので、中期に至っては「庚申講」の主神である「青面金剛」を始めとする様々な石仏が、あちこちで造営されています。現代の感覚からは「山奥の不便な所」と思われがちなここ板殿でも、全国の流れに遅れることなく同じ頃に石仏を祀り、生活の中に定着させていったようです。また

板殿には、明治から大正にかけて乗鞍に住み、遭難者の救済や登山道の修復に一生を捧げた「板殿仙人(通称イタショ)」の故郷でもあります。

今回はこの地の人々が代々受け継いで来た素朴な「石仏たちの正月」行事を紹介します。

七社詣り

12月31日から1月1日へと日付けが変わると、手に手にお神酒を持った村人達が(おもに男性)が、村内にある神社や石仏に新年の挨拶に出かけます。「七社詣り」と呼ばれるこの行事は板殿地区の初詣です。いつの時代に始まったのか定かではありませんが、新しく石仏を造るたびに詣る場所も増えていき現在に至っているのではないのでしょうか。

「どんに雪が降っても(どんなに沢山雪が降っても)男衆は行かはるぜ。朝行ってもいんやけど、紅白が終わった勢いで行かはるんや」と、子供の頃からこの地に住んでいるという女性が話してくださいました。



②牛神様・・・馬頭観音
安政7年3月



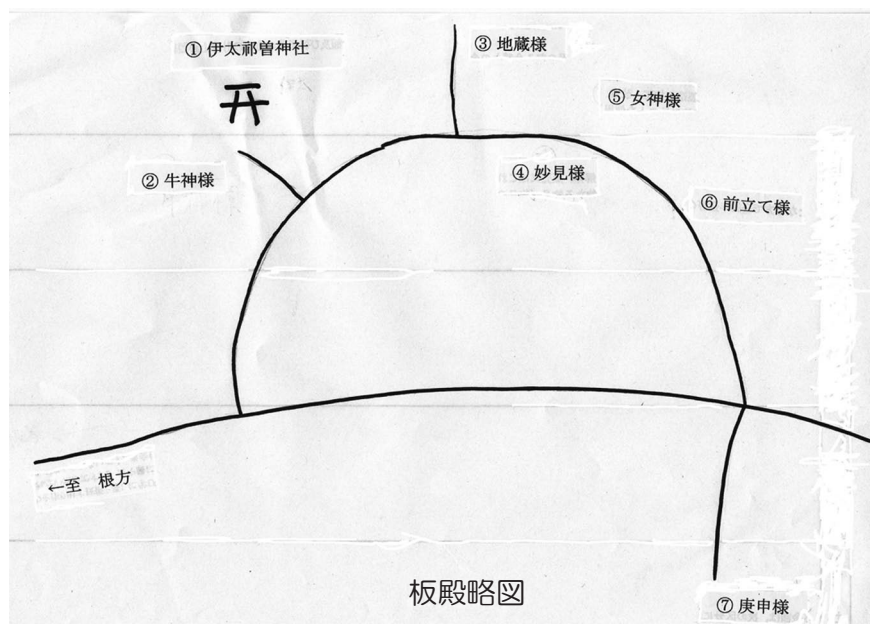
③地藏菩薩・・・かつては
背後の山に祀られていた



④妙見様・・・「妙見尊王菩薩」と
書かれた石地藏菩薩と磁器の神像



⑤女神様・・・双対道祖神
慶応2年2月



板殿略図



⑥前立て様・・・現在は祠に祀られているが、かつては
祠は無く近所の方が真綿のほお被りをかぶせてみえた



⑦庚申様・・・青面金剛
享保7年7月、地藏菩薩

＜板殿の思い出＞

板殿というと、白井小学校の黒い木造校舎があった頃の子も達を思い出す。

板殿からの通学路は、学校の少し上手の国道に直接下りてくる急坂だった。秋口になるとランドセルに鈴をつけ、「今日もクマの糞落ちとったよ。」「今日は山ブドウ食べとったよ。」と、報告してくれる。雪が積もると、一気にソリで滑り降りて来て、帰りはそのソリを引っ張って上り、ソリをそこに置いて家に帰った。毎日の通学が遠足のような板殿の子も達は脚も速くたくましかった。

現在は学校も統合されスクールバスで通う子も達。こんな楽しそうな体験、今の子も達はしているのだろうか。

松崎まみ記

樹 影（森田清遺稿集より抜粋）

森田 清

昭和 54 年 11 月 28 日午前 6 時 50 分、御嶽山頂剣が峰の南方、地獄谷が山頂につき当たるあたりから大噴煙が上がった。10 カ所以上の噴火口をつくり、そのうち 2 カ所からは白と黒灰色の噴煙を噴き上げた。この御嶽山は地質学的には 1 万年以上前に噴火のこん跡があるとされているが、歴史上の記録は残っていない。また気象庁は国内の火山 170 のうち常時監視の火山と、実際には噴火はまず考えられない死火山とに分けているが、御嶽山は後者と信じられていた。このように全く予想もしなかった御嶽山の噴火だったため各新聞では一様に大きく取り上げ噴煙の写真をのせたことは皆様よくご存知のとおりです。

私の勤務する研究所も地震予知や農作物の調査など行っているため、噴火当日社長より早速現地調査を命ぜられたため、取りあえず所員 2 名を開田村へ出張させ地獄谷、濁川温泉付近の降灰による被害調査と試料の採取を行いました。幸い農作物の被害も大した事もなく、採取した降灰の分析から灰は安山岩であり、火山活動の始まりではあっても大規模なものではなく、地上より浸透した雨水の地下熱源による水蒸気爆発であろうと推測しその旨報告したものでした。（数日後噴煙は少なくなり現在は 3 カ所から水蒸気を出している）

ところが有珠山噴火の時、飛行機による地上温度測定を行ったため、読売新聞から今回も是非写真をと依頼される羽目になってしまいました。目的は 55 年元旦の特別号にのせたいという事でした。このような次第で 11 月末、晴天の日を選び午前 8 時御嶽山頂より 600m の高度で熱映像写真をとりました。これは地上からの赤外線（熱線）をフィルムにとり解析するもので 0.1 度の温度差まで測定する事が出来るものです。これをカラー表示すると高温部は赤く、低温部は淡青色となってきます。この写真が読売新聞の正月号にのったものです。写真からの判定では噴煙の起こった部分にはほぼ東西に長く高温帯があり、以前から蒸気を出している所も高温を示していました。

さて今回（54 年）の御嶽山の熱映像について地震学者の人々の見方はどうであったかを紙上から引用すると次のように言われています。

御嶽山の映像には噴火口の周囲が広く熱くなっていないので水蒸気爆発と断定できる。――御嶽山の火山ガスの分析ではガスはかなり高温の状態で発生している。――新しい噴気口が出来そうな兆候は認められないので、当分は大きな爆発はないだろう。

では火山爆発の予兆はあったのであろうか。2、3 年前から予兆らしきものがあつた。時々つき上げるような地震があり、濁川温泉の水温が 5 度も下がった。不断降りてこない猿が民家の近くまできた。カモシカもよく見かけるようになった。と言うのは、土地の人の話。また地震との関係はどうかを学会誌、地震観測所その他から見ると、数年前から御嶽山ろく一帯では体に感じないものの無数の地震が起きていて、なぞの群発地震と名付けている。――昨年 10 月頃、御嶽山か

ら南寄りの所でマグニチュード 5.5 の群発地震があった。――駿河湾での岩盤のひずみが強まり東海地震が心配されるが、ひずみが強まれば摩擦熱も増大し、岩がドロドロに溶けたマグマの圧力も高まり火山活動も活発になる。しかし富士火山帯の活動が今のところ沈静化しているので御嶽山の噴火と東海地震を結びつけて考えるのは早計。

以上のように今回の御嶽山の噴火を契機として火山活動や地震に関係するいろいろの記事が、また学会内での発表が表面に出て来たことです。ただ被害地震ゼロの翌年は比較的大きな地震が起きている前例からも今年度は注意しなければと考えるのも常識となっています。確かに伊豆半島の地殻変動も相変わらずですが、しかし東海地震が御嶽山の噴火で近くなったと考える必要もないことも事実と言えましょう。

ともかくもデータ不足で何ともいえないと言うのが本音であり、次々と予測しない事象が出てくる都度、地震予知に関係している研究者のもどかしさとあせりが目に見えるような気がします。

ともあれ、最近桜島、阿蘇山など火山の活動が盛んになっているようです。しかしだからといって地震との関係も明確になってないのです。日本は地震国で地震に関する研究も世界で一番進んでいるのですが、なおかつ判らないところが多いのも事実です。従って、地震が起こってもおかしくない、と同時に、いつ来るかと言えば明日かもしれないし、50 年先かもしれないと言えるものです。

昭和 55 年 4 月記

森田清氏 略歴

大正 12 年 12 月 金沢市で生を受ける

金沢第四高等学校理科卒

京都大学理学部地質鉱物学科卒

三菱鉱業株式会社朝鮮鉱業所技師

入営、除隊、陸軍中尉

福井大学助教授

工業技術院名古屋工業技術試験所四部長

株式会社柳本製作所取締役

日本ジャーナルアッシュ株式会社取締役社長を経て会長

玉野総合コンサルタント株式会社、技術試験所研究所長を経て常任顧問

※森田清氏は当会会員の小原靖子さんの父上にあたり、生前に書き残したものを遺族が遺稿集「樹影」として纏められました。昨年 9 月、35 年ぶりに御嶽山が噴火し、記憶もまだ生々しくタイムリーな内容でもあるため、小原さんの了承を得て前回の御嶽山噴火（昭和 54 年）にまつわる部分を抜粋して掲載しました。

■ 会員を募集しています！ 年会費＝個人 2,000 円 家族 3,000 円 団体 5,000 円

あなたの知人、友人に入会をおすすめてください

・郵便振替 00800-8-129365 振込先 乗鞍岳の自然を考える会

くらがね通信 第 59 号（早春号）2015 年 1 月 25 日 発行

発行者 乗鞍岳と飛騨の自然を考える会

〒506-0055 岐阜県高山市上岡本町 4-218-3 飯田 洋

TEL：0577-32-7206・FAX：0577-32-7207

編集室では皆さんからの原稿、ご意見等をお待ちしています。

■ 編集責任者：松崎 茂

E-mail：ponykun0428@hidatakayama.ne.jp TEL：0577-34-4703

■ 編 集 者：住 寿美子

TEL：0577-34-7237

表紙写真提供：小池 潜

印刷：アドプリンター